

ヨハネの残酷物語

イエスの先達で悲運な聖者

2022/11/24



ヨハネとはだれですか？

私は、クリスチャンではないのですが、ときどき、『聖書』を読みます。とても面白いです。ためになるお話で一杯です。人生、清く正しく美しく生きようと思っている私にはなくてはならぬ本です。お説教ばかりではなく、面白

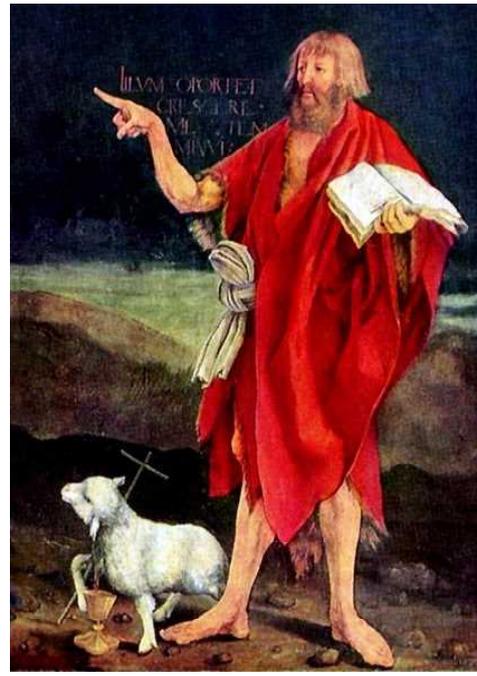
い物語も一杯載っていて楽しめます。いま、NHKの木曜講座で、みなさまとご一緒に新約聖書に書かれている聖歌「マリアの賛歌：マニフィカート」をバッハの作曲した音楽で聴いています。感動的です。この「マニフィカート」では、イエスとヨハネの誕生秘話が語られています。特に、イエスの先達として半年前に産まれたヨハネは可哀想です。大役を担(にな)う者であり、イエスと同じ神の子として精霊から産まれたのに、世間はイエスばかり賞賛してヨハネのことはイエスの弟子のようにあつかいます。また、ヨハネ自身も、それで満足しています。ヨハネはイエスよりもちょうど半年早く産まれたのでイエスの兄の立場にいます。母親は違うものの親同士親類です。もっと自己を主張してもいいのですが、神の子イエスの降臨をユダヤ人たちに告げ広げて、「私よりもさらに力のある方が、あとからおいでになります。私には、かがんでその方の靴の紐を解く値うちもありません」などといって大いに謙遜しています。そして、最後には、ユダヤの領主ヘロデによって捕らえられ、ヘロデの王妃の連れ子サロメの邪淫によって首を刎ねられます。良いとこなしの男です。そぞろ哀れを催します。

哀れなヨハネ

また、堂々としたイエスに比べて、ヨハネの風貌も哀れなものです。痩せて髭だらけで、風体はまるで浮浪者や野生人のようで、薄汚い姿です。それも仕方がないのは、聖書は次のように紹介しているからです。

ヨハネは、らくだの毛で織った物を着て、腰に皮の帯を締め、いなごと野蜜を食べていた。【マルコ伝第1章第6節】

それで、絵画で描かれるヨハネは、裸足で裸近く、十字架をかたどった葦の杖をもち、生け贄の羊を従えたその通りのみすばらしい姿でした。



豪華な衣装のヨハネ

しかし、世の中、必ず、例外というものがあります。豪華な衣装に身を包んだヨハネ像もあります。あの有名な「ヘントの祭壇画」に描かれたヨハネがそれです。ベルギーの州都の一つヘントにある聖バーフ大聖堂（旧洗礼者ヨハネ教会）に祀られている「神秘の子羊」と称される12面からなる祭壇画の中央には、イエスを挟んで聖母マリアと先駆者ヨハネが両脇に描かれています。寄進者は、ベルギーで一番の商人で政治家でヘントの市長格のヨドクス・フイエトです。ヤン・ファン・エイクに祭壇画の制作を依頼し1432年に披露されました。ヨハネはやはり自身のエンブレムであるラクダの毛衣を着てその上に緑色のマントを羽織っています。このマントは豪華な宝石類で飾られています。お金持ちの寄進者の好みなのでしょうが、ヨハネの真意からは遠いものです。足だけは裸足（はだし）です。右手を掲げながら神の子羊についてヨハネが語った有名な言葉「見よ、神の子羊」（ECCE AGNUS DEI：『ヨハネによる福音書』1:29）を口にしています。



神の子イエスの先駆者ヨハネ

ヨハネのことは、ユダヤ人の間では数千年前の旧約聖書の時代からよく知られた有名な存在です。『マルコ伝』では、古い『イザヤ書』によってヨハネの存在と役割がすでに予言されているというのです。ここで出てくる『イザヤ書』とは、旧約聖書の三大預言書の一つで、伝承では紀元前8世紀の預言者イザヤが述べた言葉とされています。イザヤは、神の子がこの世に降臨し、そのことを先駆者が説いて廻ると言っているのです。神の子がイエスであり、その降臨を説いて廻るのがヨハネです。

預言者イザヤの書にこう書いてある。【イザヤ書40章3節】 「見よ。わたしは使い（先駆者ヨハネのこと）をあなた（神の子イエスのこと）の前に遣わし、あなたの道を整えさせよう。荒野で叫ぶ者の声がする。『主の道を用意し、主の通られる道をまっすぐにせよ』」。そのとおりに、バプテスマ（洗礼者）のヨハネが荒野に現われて、罪が赦されるための悔い改めのバプテスマを説いた。そこでユダヤ全国の人々とエルサレムの全住民が彼のところへ行き、自分の罪を告白して、ヨルダン川で彼からバプテスマを受けていた。ヨハネは、らくだの毛で織った物を着て、腰に皮の帯を締め、いなごと野蜜を食べていた。彼は宣べ伝えて言った。「私よりもさらに力のある方が、あとからおいでになります。私には、かがんでその方のくつのひもを解く値うちもありません。私はあなたがたに水でバプテスマを授けましたが、その方は、あなたがたに聖霊のバプテスマをお授けになります。【マルコ伝第1章第1節】

ヨハネの誕生

ヨハネの誕生秘話もまた、聖書(新約)に書かれています。

ユダヤの王ヘロデの時代、アビヤ組の祭司にザカリアという人がいた。その妻はアロン家の娘の一人で、名をエリサベトといった二人とも神の前に正しい人で、主の掟と定めをすべて守り、非のうちどころがなかった。しかし、エリサベトは不妊の女だったので、彼らには、子供がなく、二人とも既に年をとっていた。さて、ザカリアは自分の組が当番で、神の御前で祭司の務めをしていたとき、祭司職のしきたりによってくじを引いたところ、主の聖所に入って香をたくことになった。香をたいている間、大勢の民衆がみんな外で祈っていた。すると、主の天使が現れ、香壇の右に立った。ザカリアはそれを見て不安になり、恐怖の念に襲われた天使は言った。「恐れることはない。ザカリア、あなたの願いは聞き入れられた。あなたの妻エリサベトは男の子を産む。その子をヨハネと名付けなさい。その子はあなたにとって喜びとなり、楽しみとなる。多くの人もその誕生を喜ぶ。彼は主の御前に偉大な人になり、ぶどう酒や強い酒を飲まず、既に母の胎にいるときから聖霊に満たされていて、イスラエルの多くの子らをその神である主のもとに立ち帰らせる。彼（ヨハネ）はエリヤの霊と力で主に先立って行き、父の心を子に向けさせ、逆らう者に正しい人の分別を持たせて、準備のできた民を主のために用意する」。そこで、ザカリアは天使に言った。「何によって、わたしはそれを知ることができるのでしょうか。わたしは老人ですし、妻も年をとっています」。天使は答えた。「わたしはガブリエル、神の前に立つ者。あなたに話しかけて、この喜ばしい知らせを伝えるために遣わされたのである。あなたは口が利けなくなり、この事の起こる日まで話すことができなくなる。時が来れば実現するわたしの言葉

を信じなかったからである。【ルカ伝第1章第5節】

民衆はザカリアを待っていた。そして、彼が聖所で手間取るのを、不思議に思っていた。ザカリアはやっと出て来たけれども、話すことができなかった。そこで、人々は彼が聖所で幻を見たのだと悟った。ザカリアは身振りで示すだけで、口が利けないままだった。やがて、務めの期間が終わって自分の家に帰った。その後、妻エリサベトは身ごもって、五か月の間身を隠していた。そして、こう言った。「主は今こそ、こうして、わたしに目を留め、人々の間からわたしの恥を取り去ってくださいました」。【ルカ伝第1章第21節】

イエスの誕生が予告される

六か月目に、天使ガブリエルは、ナザレというガリラヤの町に神から遣わされた。ダビデ家のヨセフという人のいいなずけであるおとめのところに遣わされたのである。そのおとめの名はマリアといった。天使は、彼女のところに来て言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる」。マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ。すると、天使は言った。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない」。マリアは天使に言った。「どうして、そのようなことがありえますか。わたしは男の人を知りませんのに」。天使は答えた。「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。あなたの親類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている。神にできないことは何一つない」。マリアは言った。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように」。そこで、天使は去って行った。【ルカ伝第1章第26節】

マリアがエリサベトを訪ねる

そのころ、マリアは出かけて、急いで山里に向かい、ユダの町に行った。そして、ザカリアの家に入ってエリサベトに挨拶した。マリアの挨拶をエリサベトが聞いたとき、その胎内の子がおどった。エリサベトは聖霊に満たされて、声高らかに言った。「あなたは女の中で祝福された方です。胎内のお子さまも祝福されています。わたしの主のお母さまがわたしのところに来てくださるとは、どういうわけでしょう。あなたの挨拶のお声をわたしが耳にしたとき、胎内の子は喜んでおどりました。主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いですでしょう」。【ルカ伝第1章第39節】

マリアの「マニフィカート」

そこでマリアは、このエリサベトの言葉に感動して神を讃えました — 「わが魂は主を主をあがめます」(Magnificat anima mea Dominum,) マリアは、三か月ほどエリサベトのところに滞在してから、自分の家に帰った。【ルカ伝第1章第46節】

洗礼者ヨハネの誕生

さて、月が満ちて、エリサベトは男の子を産んだ。近所の人々や親類は、主がエリサベトを大いに慈しまれたと聞いて喜び合った。八日目に、その子に割礼を施すために来た人々は、父の名を取ってザカリアと名付けようとした。ところが、母は、「いいえ、名はヨハネとしなければなりません」と言った。しかし人々は、「あなたの親類には、そういう名の付いた人はだれもない」と言い、父親に、「この子になんと名を付けたいか」と手振りで尋ねた。父親は字を書く板を出させて、「この子の名はヨハネ」と書いたので、人々はみんな驚いた。すると、たちまちザカリアは口が開き、舌がほどけ、神を賛美し始めた。

近所の人々はみんな恐れを感じた。そして、このことすべてが、ユダヤの山里中で話題になった。聞いた人々はみんなこれを心に留め、「いったい、この子はどんな人になるのだろうか」と言った。この子には主の力が及んでいたのである。

【ルカ伝 第1章 第57節】



ティントレット(1518~94/95) 洗礼者聖ヨハネの誕生

ザカリアの預言「ベネディクトゥス・ドミヌス」

「ルカ伝」には三つの賛歌が記されています。「マリアの賛歌 Magnificat」(第1章 46-55)と「ザカリアの賛歌 Benedictus Dominus」(第1章 68-79)と「シメオンの賛歌 Nunc dimittis」(第2章 29-32)の三つです。

父ザカリアは聖霊に満たされて、ヨハネの誕生をこう預言しました。これが、「ザカリアの賛歌」の「ベネディクトゥス・ドミニヌス」（神を褒め称えよ）です。

[これが、ヨハネ側が神を賛美する「マニフィカート」に当たります]

| | |
|---|--|
| <p>ほめたたえよ、イスラエルの神である主を。主はその民を訪れて解放し、我らのために救いの角(つの)を僕ダビデの家から起こされた。</p> <p>昔から聖なる預言者たちの口を通して語られたとおりに。それは、我らの敵、すべて我らを憎む者の手からの救い。主は我らの先祖を憐れみ、その聖なる契約を覚えていてくださる。</p> <p>これは我らの父アブラハムに立てられた誓い。</p> <p>こうして我らは、敵の手から救われ、恐れなく主に仕える、生涯、主の御前に清く正しく。</p> <p>幼子よ、お前はいと高き方の預言者と呼ばれる。</p> <p><u>主に先立って行き、その道を整え、主の民に罪の赦しによる救いを知らせるからである。</u></p> <p>これは我らの神の憐れみの心による。この憐れみによって、高い所からあけぼのの光が我らを訪れ、暗闇と死の陰に座している者たちを照らし、我らの歩みを平和の道に導く。</p> | <p>Benedictus Dominus, Deus Israel, quia visitavit et fecit redemptionem plebi suae et erexit <u>cornu salutis nobis</u> in domo David pueri sui, sicut locutus est per os sanctorum, qui a saeculo sunt, prophetarum eius, salutem ex inimicis nostris et de manu omnium, qui oderunt nos; ad faciendam misericordiam cum patribus nostris et memorari testamenti sui sancti, iusiurandum, quod iuravit ad Abraham patrem nostrum, daturum se nobis, ut sine timore, de manu inimicorum liberati, serviamus illi in sanctitate et iustitia coram ipso omnibus diebus nostris. Et tu, puer, propheta Altissimi vocaberis: praeibis enim ante faciem Domini parare vias eius, ad dandam scientiam salutis plebi eius in remissionem peccatorum eorum, per viscera misericordiae Dei nostri, in quibus visitabit nos oriens ex alto, illuminare his, qui in tenebris et in umbra mortis sedent, ad dirigendos pedes nostros in viam pacis.</p> |
|---|--|

ここで言う「救いの角」とは、エルサレムの神殿の至聖所にある祭壇の四隅に生えていた角のことです。罪を犯した人が、この祭壇の角に無事につかまることができたなら、その人は罪を赦されたと言われています。

「幼子(ヨハネ)は身も心も健やかに育ち、イスラエルの人々の前に現れるまで荒野にいた」。【ルカ伝第1章第80節】

ヨハネはイエスに洗礼を施します。

そのころ、イエスはガリラヤのナザレから来られ、ヨルダン川で、ヨハネからバプテスマをお受けになった。そして、水の中から上がられると、すぐそのとき、天が裂けて御霊が鳩のように自分の上に下られるのを、ご覧になった。そして天から声がした。「あなたは、わたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ」。そしてすぐ、御霊はイエスを荒野に追いやられた。イエスは四十日間荒野にいて、サタンの誘

惑を受けられた。野の獣とともにおられたが、御使いたちがイエスに仕えていた。ヨハネが捕えられて後、イエスはガリラヤに行き、神の福音を宣べて言われた。「時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい」。【マルコ伝第1章第9節】

ジョヴァンニも、ハンスも、シェーンも、みんなヨハネ

日本では「ヨハネ」と呼ばれていますが、じつは、ヨハネはオペラや映画で日本人にもおなじみの名前なのです。彼は、国によって、シェーンとも、ハンスとも、色々な名前と呼ばれています。

オスカー・ワイルドの戯曲「サロメ」とそれをオペラにしたリヒャルト・シュトラウスの楽劇《サロメ》に登場する「ヨハネ」は、「ヨカナーン」と呼ばれます。ラテン語で Johannes です。ヘブライ語の「ヤハウエは恵み深い」を意味する「**ヨハナーン**」(יְהוֹנָתָן, Yôhānān) が元の形とされています。

ドイツ語ではラテン語を受け継いで、Ioannes (ヨハンネス)、Johannes (ヨハネス) などと変化したものを用いています。省略形で Hans (**ハンス**)、Johann (ヨハン) となります。ワーグナーの楽劇《ニュルンベルクのマイスタージンガー》の主人公ハンス・ザックスは、実は「ヨハネ」なのです。第3幕の舞台は「ヨハネ祭」になり、ハンス・ザックスは、村人たちから散々に褒め称えられます。

英語では、John (**ジョン**)。英語の Shane (**シェーン**) は アイルランド語やゲール語の Sean が英語化したものです。

イタリア語では、Giovanni (**ジョヴァンニ**)。モーツァルトの歌劇《ドン・ジョヴァンニ》は、実はヨハネなのです。

ハンガリー語では、János (**ヤーノシュ**)。コダイの歌劇《ハーリ・ヤーノシュ》もまた、実はヨハネなのです。

フランス語では、Jean (**ジャン**)。ジャン・ジャック・ルソーです。彼はフランス語圏ジュネーヴ共和国に生まれでヨハネです。

ポルトガル語では、João (ジョアン)。

スペイン語では、Juan (フアン)。

ポーランド語・チェコ語・オランダ語・デンマーク語では、Jan (ヤン) - そのほか、Jani (ヤニ)、Janne (ヤンネ)、Juhani (ユハニ)、Juha (ユハ)、Juho (ユホ)、Jukka (ユッカ)、Jussi (ユッシ)、Hannu (ハンヌ) などと呼ばれています。

サロメに首を斬られるヨハネ

ヨハネの末路もまた、哀れでした。ヘロデ王によって首を刎ねられたのです。このヨハネ斬首のお話は、聖書の「マタイ伝」の第14章の第1節から第12節に書かれている物語が基になっています。また、同じ話が、「マルコ伝」の第6章の14節から29節にも書かれています。この聖書の「マタイ伝」と「マルコ伝」の二種類の物語を題材にして、ワイルドは戯曲『サロメ』を書いたのです。さすが、耽美主義(たんびしゅぎ)の小説家ワイルドです。着眼点は抜群です。この「サロメの物語」ほど、聖書にふさわしくない物語もあり

ません。イエスに次いで偉大な神の子のヨハネの惨殺物語などだれが喜んで読むでしょうか？ それをオペラで観たりするでしょうか？

「ヨハネとサロメ」の物語

さて、イエスの名が知れわたって、ヘロデ王の耳にはいった。ある人々は「バプテスマのヨハネが、死人の中からよみがえってきたのだ。それで、あのよきな力が彼のうちに働いているのだ」と言い、他の人々は「彼はエリヤだ」と言い、また他の人々は「昔の預言者のような預言者だ」と言った。ところが、ヘロデはこれを聞いて、「わたしが首を切ったあのヨハネがよみがえったのだ」と言った。

【ここでもヨハネはイエスと間違えられています。ここから先は、ヘロデと生きているときのヨハネの出来事の回想となります】

このヘロデは、自分の兄弟ピリポの妻ヘロデヤをめとったが、そのことで、人をつかわし、ヨハネを捕えて獄につないだ。それは、ヨハネがヘロデに、「兄弟の妻をめとるのは、よろしくない」と言ったからである。そこで、ヘロデヤはヨハネを恨み、彼を殺そうと思っていたが、できないでいた。それはヘロデが、ヨハネは正しくて聖なる人であることを知って、彼を恐れ、彼に保護を加え、またその教えを聞いて非常に悩みながらも、なお喜んで聞いていたからである。ところが、よい機会がきた。ヘロデは自分の誕生日の祝いに、高官や将校やガリラヤの重立った人たちを招いて宴会を催したが、そこへ、このヘロデヤの娘がはいつてきて舞いをまい、ヘロデをはじめ列座の人たちを喜ばせた。そこで王はこの少女に「ほしいものはなんでも言いなさい。あなたにあげるから」と言い、さらに「ほしければ、この国の半分でもあげよう」と誓って言った。そこで少女は座をはずして、母に「なにをお願いしましょうか」と尋ねると、母は「バプテスマのヨハネの首を」と答えた。するとすぐ、少女は急いで王のところに行って願った、「今すぐに、バプテスマのヨハネの首を盆にのせて、それをいただきとうございます」。王は非常に困ったが、いったん誓ったのと、また列座の人たちの手前、少女の願いを退けることを好まなかった。そこで、王はすぐに衛兵をつかわし、ヨハネの首を持って来るように命じた。衛兵は出て行き、獄中でヨハネの首を切り、盆にのせて持ってきて少女に与え、少女はそれを母にわたした。

【ここでヘロデ王はヨハネを殺したのです。回想はここで終わります】

ヨハネの弟子たちはこのこと（ヨハネが首を斬られて亡くなったこと）を聞き、その死体を引き取りにきて、墓に納めた。さて、使徒たちはイエスのもとに集まってきて、自分たちがしたことや教えたことを、みんな報告した。【マルコ伝第6章第14節—第29節】

ワイルドの戯曲『サロメ』の物語

ワイルドの書いた『サロメ』の戯曲のあらすじは次のようです。ここでの「ヨカナン」はヨハネのことです。

ヘロデ王の宮殿のテラス。月がきれいな夜です。宮殿内では、王の誕生日を祝う盛大な宴会が開かれています。中央に空井戸があります。若いシリア人の衛兵隊長ナラボートが宴席にいる王女サロメをうっとり見つめています。空井戸の奥から「救い主がこの世に現われる」というヨカナンの声がしま

す。サロメがテラスに出て来ます。ヨカナーンの声を聞いて井戸から出してここへ連れてくるように命じます。連れてこられたヨカナーンは、「どこにいるのか罪深き者は。姦淫にふける女は！」とサロメの母の王妃ヘロディアスを激しく非難します。その毅然たる姿に魅せられたサロメはヨカナーンに近づいて身体に触ろうとします。ヨカナーンはそれを退けます。媚態を見せながらも近寄ろうとするサロメ。その様子にナラボートは興奮のあまり剣を抜き自らを刺して死にます。ヨカナーンは井戸の中へ戻っていきます。

ヘロデ王がサロメを連れに来て、ナラボートの血で足をすべさせます。遺体を片付けさせて宴会をテラスで催すことにします。お客のユダヤ人たちもテラスに出て来ます。彼らは奇跡で治療をほどこすイエスの話をします。ヘロデ王はサロメに踊るように命じます。サロメが断ると「欲しいものはなんでもやる」とヘロデがいうのでサロメは「七つのヴェールの踊り」を踊ります。褒美にサロメはヨカナーンの首を求めます。王が渋々承知すると王妃は王のはめていた「死の指環」を兵士に与えます。首切り役人が井戸へ下りていきます。サロメは井戸の中をのぞき込んで聞き耳を立てます - 「ものおと一つしない」。首の落ちる鈍い音がして、首切り役人が銀の盆にヨカナーンの首を乗せて現われます。サロメは血の滴るその首に深々とキスをします。あまりのおぞましさに、ヘロデは、「あの女を殺せ」と命じて席を立ちます。幕。

「サロメ」という娘の名前

ヘロデ王はヨハネの首を刎ねました。原因は、ヨハネが、サロメの義父ヘロデとその妻ヘロディアスの結婚を強く咎めたことです。ヘロデが王になったとき兄の妻ヘロディアスを王妃に迎えました。そのことは、兄弟の妻であった女性との結婚は、律法が「近親相姦」に該当するとして禁じていました。（「レビ記」18:16）ただ、19世紀の世紀末の 아일랜드 の戯曲家ワイルドの戯曲はヘロデの義理の娘サロメが、強くヨハネの首を求めたとしています。この娘、サロメの名は新約聖書には記されていません。ただ、古代イスラエルの著述家であるフラウィウス・ヨセフスが著した『ユダヤ古代誌』に「サロメ」という女性の名があります。このサロメと洗礼者ヨハネの斬首との関係ではつまびらかではありませんが、父母の名前などは聖書の記事と一致します。そのため、同一人物であると考えられて、ワイルドもそれで「サロメ」の名でしるしたのでしょう。このサロメは、新約聖書以外の文献の記述から、西暦 14 年頃に生まれ、死んだのは 62 年から 71 年の間と考えられています。その生涯の詳細については定かではないということです。結局、聖書では、王ヘロデと王妃ヘロディアス（聖書ではヘロデア）の名前は記したものの、この娘の名前についてはなんら審（つまび）らかにしていません。片手落ちです。でも、聖書の作家は、ヨハネの首を求めたのはヘロデ王の妻のヘロデアであって、娘は母のヘロデアの望みを王に伝えたに過ぎないと思ったのです。結局、「サロメ」の名の確証は得られないままです。

サロメの「愛の死」

なぜ、ワイルドは、聖書の先駆者ヨハネを題材にして、このような残虐で扇情的な戯曲を書いたのでしょうか？ その答えは、ヨハネ（ヨカナーン）の首を前にして、サロメがつぶやく最後の台詞にその答えが隠されています。こ

こでの森鷗外の歌舞伎調の訳は時代がかっています。なかなか、読ませます。

サロメ

お前の美しさが慕わしい。わたしはお前の体が欲しい。わたしの渴きは酒では止まらぬ。わたしの飢えは林檎では直らぬ。ヨカナーンや。まあ、わたしはどうしたら好かるうね。川の水でも海の水でも、わたしの胸の火は消えぬ。ええ。なぜお前はわたしの顔を見なかったのだえ。つい見てさえくれたなら、わたしを愛してくれたらうに。きつとわたしを愛したに違いない。死の秘密より大きいのが、愛の秘密であるではないか。

このサロメも最後の言葉は、意味深長です。ワイルドも鷗外も、ワーグナーの《トリスタンとイゾルデ》を意識していたかどうかはわかりませんが、ここでサロメが「愛の死」について語っていることから、このワイルドのお芝居は、イゾルデがトリスタンに愛をねだったように、サロメがヨハネに愛を迫った、もう一つの《トリスタンとイゾルデ》であることが分かります。トリスタンとイゾルデの場合、「愛と死」は併合するものですが、サロメとヨハネの「人間の欲望と神の義が相対する愛と死」は、そのパロディでしかありません。でも、良く出来た、あってもいいパロディです。

顔を背けるサロメ

このヨハネ斬首の瞬間を題材にした絵画は多いのです。それも、大半の画家たちは、サロメはヨハネの首を斬ることを望んだものの、サロメがヨハネの首から恐ろしげに目をそらしたり、うとましく思ったりする表情を描いています。



ロジェ・ファン・デル・ウェイデン 1455年頃



ティツィアーノ・ヴェチェツリオ 1515年頃

「ヨハネとサロメ」とは呼ばない

それとは違って、ワイルドは、サロメを、敢えて、死んだヨハネの首をしっ
かり持って大胆にキスをする女に仕立て上げました。この中世の絵画と19
世紀の戯曲の主題の違いは、時代の違いにあります。中世の絵画は聖書の文
言に忠実に基づいています。サロメは、母親のヘロディアスの命令に従って
ヨハネの首を所望したのであり、サロメ本人は汚れたヨハネの首など欲しく
なかったのです。一方、ワイルドは、よく知られた歴史的な聖書の物語から、
サロメという奔放で多情な若い娘を作り出しました。そして貴き聖ヨハネを
淫乱の相手にした少女の一介(かい)の戯れこそ、19世紀末の耽美主義と世
紀末芸術が望んだ破滅的なものであったのです。



母ヘロデアにヨハネの首を急ぎ届けるサロメ BOTTICELLI 1488頃

「ヨハネとサロメ」とは呼ばない

サロメは、ヨハネに愛されて一緒に死にたかったのです。小心な義父のヘロ
デと淫乱で権力癖の強い母のヘロディアスや情欲の塊である近衛隊長ナラボ
ートや宗教論争に明け暮れるユダヤ人たちや権力欲の化身のローマ人たちに、
サロメは、強く嫌悪を抱いていたのです。純真な乙女サロメは、この邪悪な
世界から逃れて、一人、清く正しく美しく生きたかったのです。ただ、この
サロメを汚辱の世界から救ってくれる人がいるならば、それはヨハネです。
サロメは、神の子ヨハネの説教を良く聞いて、この世の他に天国があること
を知っていました。純粋な愛を求めるサロメにとって、この汚れたユダヤの
世界では、死も愛も同じでした。サロメは、ヨハネの首を所望すれば、きっ
とヘロデは、ヨハネと一緒にサロメも殺すに違いないことが分かっていた
ました。そうすれば、後世は、ヨハネをサロメと結びつけて、「ヨハネとサロメ」
と言うでしょう。

サロメと同じ欲望と背信の時代

しかし、そうはなりません。いかにワイルドが精魂傾けて戯曲『サロ
メ』を書いたにしても、後世が、トリスタンとイゾルデを結びつけて《トリ
スタンとイゾルデ》としたようにはならなかったのです。世間は、サロメの

ヨハネへの愛が、イゾルデのトリスタンへの愛に優るものであることに気がつかないのです。これは、サロメが悪いのではなく、ワイルドが悪いのではなく、時代が悪かったのです。ワイルドの時代は世紀末であり、シュトラウス時代は世界大戦の前夜でした。どちらも、欲望と背信の時代、すなわち、サロメと同じ時代でした。ワイルドの戯曲も、リヒャルト・シュトラウスの楽劇も、本心は臆病で淫乱で情欲の塊であり平和論争に明け暮れる教会や政府や世間から、ヘロデ王がサロメの死を命じたように、めでたく上演禁止を命じられました。サロメも、ヨハネも、良いところまでいっていたのに残念です。

フロベールとマスネ

文学史上、早い時期にサロメの物語を書いたのは、フロベール（1821-1880）です。彼の短編小説『ヘロディアス』がそれです。むろん、フロベールの小説にはヘロディアスの娘というだけでサロメの名前は出てきません。物語の最後に出てくる娘の踊りの描写は印象的で、この踊りを中心にオペラ作曲家ジュール・マスネ（1842-1912）が《エロディアード》（ヘロディアスのフランス語読み）を書きました。フロベールの16年後に、ワイルドはフランス語で戯曲『サロメ』を書きました。そして、リヒャルト・シュトラウスが「七つのべールの踊り」でサロメを一躍、裸で踊るキャバレーのバレリーナにしました。

ヨハネの焚骨

死んだ後も、ヨハネは酷い仕打ちに遭います。洗礼者ヨハネの崇拝を禁止させようとしたローマ皇帝ユリアヌスは、ヨハネの墓から遺骸を掘り起こさせて焼却し、風に吹き散らさせました。これを「ヨハネの焚骨(ふんこつ)」といいます。イエスは復活したのに、ここでもまたヨハネは散々です。

ヨハネとは？

では、一体、ヨハネとはなにものであったのか？ 彼は、神の子イエスの先駆けをなしてイエスに洗礼をほどこした先駆者であり、洗礼者であっただけの、出番のない介添え人役だけなのか？ それにしても、悪女のサロメに首を切り落とされ、死んだ後も、遺骨まで焚骨されるほどの酷い運命を負わされたのはなぜなのでしょう？ ヨハネは奇跡も起こせず、神からの救いもまったくありません。唯一、ヨハネを讃えたのが、父ザカリヤが歌った聖句「ベネディクトゥス・ドミニヌス」(神を褒め称えよ)だけです。

それに、どうしたことか、イエス自身もヨハネを否定した言い方をしています。ますます、ヨハネの存在が問われます。

ヨハネは燃えて輝くあかりであった。あなたがたは、しばらくの間、その光を喜び楽しむとした。しかし、わたしには、ヨハネのあかしよりも、もっと力あるあかしがある。父がわたしに成就させようとしてお与えになったわざ、すなわち、今わたしがしているこのわざが、父のわたしをつかわされたことをあかししている。

ヨハネとは？

【ヨハネ伝第5章第35節－第36節】

イエスがここで自慢する「わざ」とは、病める者を治し、死せる者を生き返らせ、貧乏な人に恵みを与え、不幸な人を幸せにし、驕れる者を追い散らし、卑しい者を引き上げたことです。当然ながら、神はヨハネに、そのような「わざ」は持たせませんでした。残念です。

[2022/11/24 都築正道]



シャガールの「孤独」：冒頭のヨハネの絵のパロディ